

騎馬民族に及び遂に民族移動として現はれるに至つたことを敘し、かゝる動因となつた點こそ蒙古の持つ世界史的意義であるとして居る。愛宕氏の論文は元代に於ける色目人の歴史の意味を究明されたものである。先づ色目人の定義を明かにし、其内容は蒙古支配下の非漢文化民を指すものと斷じ、更に陳垣氏が色目人の華化乃至華化的傾向のみを重視して居るのを非とし、これを言語・文字・本俗法・宗教・學術等の諸方面に互り、難解の元典章等を驅使して検討した後、當代の色目人は色目文化の擔當者として、漢文化の擔當者たる漢人と對立的存在を續けて居たことを力説し、而して色目文化こそ元朝の蒙古至上主義の背景となり、或はその支柱となつたものであると結んで居る。

松田氏の講ずるところは、蒙古史は蒙古民族史と同一視すべきものではなく、蒙古地方に生起した歴史的諸現象を把握するところに成立するとの立場に立ち、先づ遊牧民の生活形態を彼へ地理的事情を記し、進んで彼等遊牧民が氏族の社會から部族制國家へと發展して行く過程を攷へ、最後に彼等の有する世界史的役割は東西兩洋の中間に在つて大規模な交易の中繼を行つた所にあると論及され、従つて其役割が近世資本主義國家に取つて代られる所となるや、遂に衰微の一路を辿るに至つたと説く。要するに此の讀本に於て、遊牧民と農耕民とは其比較に於て前者が假令後進的停滯的であるとしても、それは生活様式の相違であつて、これを以つて野蠻低級とのみ考へることは出来ない」と云ふ點に重心を置き、蒙古史に對する氏の抱負の一端を披瀝

して、讀者に對し新しい認識を促したものであつて蓋し近來の上乗なるものとして推奨する。猶、志田氏の論文は支那史上に見える動動と云ふ部族は丁零・突厥など、共に「Hun」¹⁾と云ふ音をうつしたもので、トルコ民族に屬するのであるが、其住地は漢代南北朝時代を通じて、バイカル湖の南セレンガ河流域であつた。然るに五胡十六國時代には一部のものが支那内地に來り河北地方に於て政治的活動をなし當代の北支那政局に大なる影響を與へて居ることを論及したものである。但し懣むらくは更に一步突進んで極むべき點の渺からざるを思はしめる。其の著しく平調に墮し、一氣呵成とまで見える文章にも拘はらず、創刊「蒙古學」の卷頭論文としては稍々貫徹が足りない様に感ぜしめられるのはあながち評者一人のみではあるまい。以上聊か愚辭を述べてその紹介に代へ、以て榮ある「蒙古學」の誕生を祝すると共に、將來の發展を祈る微意とし度い。(華隣協會發行・價壹・二〇)(小野)

○ J. G. Droysen: Historik, Vorlesungen
über Enzyklopädie und Methodologie
der Geschichte, herausg. v. R. Häfner.

ランケと共に「歴史の世紀」の誇りを代表すると云はれるヨハン・ゲスタフ・ドレイゼンの勞作は、大別して三つの方面に於いて考へられる。一つは「アレクサンダー大王史」後の「ヘレニズ

ム史」によつて代表される古代史研究、二は、「ロシア政治史」によつて代表される prussisch-national な研究、三は Historik によつて代表される歴史の Wissenschaftliche がそれである。彼の古代史研究がヘレニズム時代を發掘したその業績の偉大さに就いては、此の場合何らの言葉も費すべき必要もないが、併し單に十九世紀と云はず古代ギリシア以來數限りなくその名を擧げうる歴史家の中で、彼の Historik に匹敵するやうな純粹に史學理論上の著述を吾々に殘したものは一人として存在しなかつたと云ふことは、充分記憶されてよい事實ではなからうか。

然るに、從來彼の殘した史學理論の著作として吾々が使用して來た Grundriss der Historik は、イエナ時代以來、二十五年間十八回以上、而も常に新なる喜びと満足とを以て彼が行つて來た講義 Vorlesungen über Enzyklopädie und Methodologie der Geschichte そのまゝのものではなく、文字どほりの Grundriss にすぎないことは云ふまでもない。それは最初一八五八年の夏學期及び一八六二年に草稿の形に於いて印刷されて聽講者に配付されたものであつて、それが公刊されたのは一八六八年のことであつた。次いで一八七五年には之を少しく修正した第二版、一八八二年には改訂第三版が出されてゐる。此等の諸版が絶版となつた後、漸く一九二五年エリヒ・ロータッカーによつて、彼の編輯する Philosophie und Geschichte 叢書の第一卷として、新たに之が復刻された。そこでドローイゼンの史學理論は、今日

に至るまでこれら諸版の Grundriss に據るより他はなかつたのである。

けれども、此の Grundriss は——その本來の目的よりして當然のことであるが——「抽象的な、簡潔な、そして屢々實際見事に公式化された H. v. Gudden によつて要約されてゐる」がために、マイネッケが自己の經驗から云つてゐる如く、「初歩の者には先づ ganz unverständlich なものであつた」として「その真相を究めることは、單に學生にとつてのみならず、讀者にとつてもまた困難であつた。斯くて講義そのものの公刊に對する欲求と希望とが盛となつて來た」のである。

此の要望に應へるべく、公刊されたのが本書に他ならない。本書は、ロシア科學アカデミーの委嘱によつて、ルドルフ・ヒュブナーがドローイゼンの遺稿中に含まれる龐大な草稿を整理することにによつて纏められた決定版である。勿論——ヒュブナー自らが本書の序文で云つてゐる如く——ドローイゼンは新學期の講義の初まる毎に訂正に訂正を重ね、書入に書入を加へたのであるから、それらの草稿の判讀には非常な努力を要したと云ふ。その際、ドローイゼン自身が一八八一年の冬學期に今一度全然新たに書下し、次いで一八八二——一八三年の冬學期に更に之に加筆したものが、主として本書の底本となつた。ドローイゼンの死は一八八四年のことであるから、本書は文字どほり彼の死の直前の講義をそのまゝ再現するものに他ならない。本書の第一部をなす此の Vorlesungen über Enzyklopädie und Metho-

logie der Geschichte は、その位に於いて、Grundriss der Historik の約六倍に相當し、而も内容に於いて詳細委曲を悉くし後者と遙かに距るものあることは、一たび本書を手にする者のひとしく感ずるところであらう。

尙本書の第二の部分には従來の Grundriss が一八八六年の第一版の形のまゝで復刻されてをり、附録の部分にもまた此の第一版と同様 Theologie der Geschichte, Erhebung der Geschichte zum Rang einer Wissenschaft, Natur und Geschichte, Kunst und Methode が收められてゐる。更に最後に收録されてゐる彼の Antrittsrede in der Berliner Akademie (1867) は、一八六八年の「王立プロシア科學アカデミー月報」に載せられたものの再録である。

要するに本書は、ドロイゼンの史學理論體系をよく一冊のうちに纏めあげたものに他ならない。本書公刊の意義が、従來未發表の彼の講義の全貌を明かにし、今日まで「綱要」によるより他はなかつたドロイゼンの歴史論をその完全な姿に於いて再現すると云ふ點にのみ存するにすぎないことは斷るまでもなからう。しかし、一般に文化危機の問題と關聯して歴史思想の混沌が云はれてゐる現代に於いては、古典的史學理論の發掘とその忠實な復原を企圖する本書の如きは、すでにそれだけで大きい意義を有つものではなからうか。少くとも、最近ドイツに於いて續々と刊行されるナチス一流の民族主義的歴史敘述の數百冊よりも、本書一冊の出現の方が吾々にとつてより高い價值をも

つことは確かであらう。吾々が本書を紹介する理由もまたこれになければならない。傾向的と稱せられ、小ドイツ派として貶せられつつ、而も同時に偉大な歴史理論を吾々に残したドロイゼンは、現代に於いてこそ、省みらるべき幾多の現實的な問題を吾々に提出するものであらう。本書の刊行を機會として、今一度古典的名著が省みられ、十九世紀史學の遺産が正しく攝取されるならば、本書の刊行は充分の意義を認められたものと云はねばならぬ。しかも、このことを通じて再び新たな出發をなすことこそ、特に現代の吾々に課せられた義務的課題ではなからうか。

(München und Berlin, 1927, Verlag von R. Oldenbourg).

(邦貨約拾六圓)(中山)

○ドロイゼン「史學綱要」

榊 俊 雄 譯

ドロイゼンの Grundriss der Historik が、初めて吾々の言葉に移されたことは、ドイツに於いて彼の講義全文が刊行されたことと相並んで、吾々のドロイゼン研究にとつて特に感謝さるべき事實であらう。

譯者は、吾邦少壯哲學者の中で特に歴史の問題に關心を示され、さきに「歴史哲學概論」その他を發表された榊俊雄氏。本書の底本として使用されたものは、一八八二年第三版である(唯、附録の論文「歴史の神學」のみは第三版には除かれてゐる

ため第一版によつて附加へられた)。

本譯書の價值を更に増すものは、譯者が卷初に附せられた論文「ドロイゼンの歴史觀に就いて」であらう。こゝに於いてはドロイゼンの傳記と共に彼の思想的系譜が辿られ、彼の學問的所産の檢討と十九世紀ドイツ史學史に於ける彼の位置づけが果されてゐる。併し、譯者の關心は、主としてドイツ歴史學派に固有な歴史主義的歴史觀の克服と云ふ現代的課題の解決に向けられてゐる。「クローチエの、またトルルチの努力はこの課題の解決に對する寄與を直指してみた」(二六頁)。譯者が、本書の翻譯を企てられたのも、また「現代に於けるこの課題の解決に對する一つの材料」を提供されんとするものに他ならない。

尙、卷末には「譯者註」並びにドロイゼンの「著書及び參考文獻」が掲げられてゐる。共に吾々の便宜を考へられた譯者の親切として感謝すべきであらう。(翁版二二一頁。東京、刀江書院發行。定價壹圓七拾錢)。(中山)

○ 現 實 と 歴 史

一九三三年、米國史學會々議に於いて、同國の碩學 Charles A. Beard 教授は、「信念の一行爲としての歴史(敘述)」なる題目のもとに講演を試みた。(American Historical Review vol. 39 所載)その中で教授は、所謂歴史學の危機に就いて論究した後、歴史家の研究對象の選擇及其その配列とが、歴史家の生ける現實との聯關、即ち必然的にして、願望的な事物との聯關の

構造(Frame of reference)——教授によればそれは、democracy, Fascism, communism の三つに大別される——に強く制約せられること、又歴史家が一の敘述をなすことは、彼の信念に基いて行ふ一の行爲たることを強調してゐる。

教授のこの主張は現在に到るまで一貫し、益々強化せられてゐる。ヘヤード教授が前の講演を行った翌一九三四年の同史學會議の席上で、Theodore Clark Smith 氏が、(恐らくヘヤード教授等の主張を前提としてであらう)米國に於ける歴史家をば大別して、「一を純粹に「客觀的眞理」の追求のみに努力する人々、今や消滅せんとしあるこの noble dream を抱ける人々、と、他を、この夢と理想とを脅かしつゝある、黨派的な doctrinaire な人々、特に歴史の經濟的説明に據る人々、又今日の生活の混亂に何等かの光明を與へんと意識的に試みる人々との二つとし、その間に架橋することの出來ぬ深溝が存することを主張した。(Am. His. Rev. vol. 40 所載)

このスミス氏の論說に對して、ヘヤード教授は、That Noble Dream なる一の駁論を發表し、(Am. His. Rev. vol. 42)そこに於いても、スミス氏が強調する如き、「ランケ流の「客觀的眞理」乃至は所謂「歴史主義」(Historicism)の立場の支持し難き」とを情密なる分析によつて指摘し、多様な現實と密接に結びつくことによつて、反つて「歴史的眞實」に接近しうることを力説してゐる。

ヘヤード教授のこの貫徹せる主張は、Alfred Vagts 氏と共に